

特集 子どもと忘れ物

● 出典：「育てる」通巻166号 昭和57（1982）年4月25日発行

子どもの忘れ物を「生かす」

青木 孝安（財団法人育てる会 理事長）

十一時をすこし回った頃であつたらうか、一人の男の子が、急な坂道をあえぎあえぎ上つて来た。手には何も持っていない。近づくにつれて、その子は、朝、元氣よく、育てる会八坂村の野外活動センターから、村の小学校に登校した、山村留学生のY君であることがわかった。

「今頃、どこへ行くんだ」

「教科書を忘れたの。先生が取りに行つて来いつて。」

農家に置いてあるの。」

「そりやーえらいことだ。学校にもどれば午後になるな。とにかくがんばつて行きなさい。」

因みに、Y君の忘れ物取りで歩かなければならぬ距離はと言うと、学校からセンター横を通り曾山という農家まで、約七キロメートルあるから、往復で十四キロメートルとなる。それに朝夕の登下校の道のり、つまりセンター学校の往復八キロメートルをたすと、合計で二十二キロメートルにもなる。

結局、この子は、その日一日のほとんどは歩き続けたことになる。学校の授業は一時間ほど受けただけになつてしまった。たった一冊の教科書を忘れたがため

に、一日の授業をフイにし、しかも二十数キロメートルも歩いたというのである。

こういうことをさせた担任の処置については、いろいろの議論が出るであろう。ややもすると、気負い立った保護者たちが、あまりにもひどい体罰であるとして校長に、あるいは教育委員会に抗議を申し込みそうである。

曰く、「往復の道での危険はどうするのか。万が一の場合の責任は誰が取るのか」、「子どもにも授業を受ける権利がある。担任がそれを無視した」と。

よしんば、このような行動に出ないにしても、忘れ物をした罰として、それを取りに行かせるのはまだよいが、距離がそれほど離れている山間地の場合は、ちよつと考えものだ。と思うのは当然のことであろう。

では当人であるY君について書こう。

担任に忘れ物を取りに行くように言われても、別に悲しくもなかったそうである。長い道のりを歩くことについては、毎日歩いていて歩き慣れているので平気だった。特に、八坂村では「歩く」という目的で生活しているので、楽しく歩くことができた。そしてもう

一つ、これ以来、Y君は、ほとんど忘れ物をしなくなったとのことである。

東京に帰ってからのY君は、八坂村の生活の一番の成果は「歩くことに強くなったこと」だと言っている。

Y君についての担任の指導について、会職員の中でもいろいろと話し合った。

Y君に忘れ物を取りにやらせたことは、賛否両論あると思うが結果的にはすばらしい指導であった。たった一冊の教科書を取りにいくために、二十数キロメートルを歩いたということは、Y君にとつてかけがえのない体験となつたのであろう。逆の言い方をすれば、Y君は忘れ物をしたからこそ、こうした体験ができたと言える。担任はY君の忘れ物という機会を利用して、それをY君の成長に役立てたと言えるのではないか。

忘れ物をする子は多い。特に、ひんぱんに忘れ物をする子は、いつでも担任の悩みの種である。子どもの忘れ物をなくすため、担任はさまざまな努力、工夫をする。それはそれでよいが、今のべたような思い切つ

た指導もまた一つの教育ではなからうか。

子どもが忘れ物をする原因についても、いろいろと語られている。そのほとんどは、生活のだらしないさ、親の不注意に帰せられている。確かにその通りだと思う。忘れ物がほとんどない子は、生活面全体にわたってきちんとしていることが多い。しかし、だからといって、忘れ物の原因をすべて親や子どもに帰してしまうのはどうであろうか。子どもが忘れ物をする原因は、担任の指導にあることも考えなくてはならないと思う。

子どもたちの発達段階を無視した過重な課題を課せば、当然、子どもたちの注意力の限界を超え、忘れ物が多くなるであろう。また、拡散的思考力にすぐれた子どもは、どうしても、創造的な行動が多くなるため、集中的思考力を必要とする「忘れ物をしない」ということから遠ざかってしまう。忘れ物指導のむずかしさはそこにあると思う。

山村留学生の場合、「忘れ物をなくす」ということは、指導者の大きな課題である。実の保護者がついていて、細かに身の整理をしてくれるのとはちがって、すべて自分でしなければならぬので、子どもたち

も大変なことである。

こうした子どもたちを見ている中で、面白いことに気づいた。

忘れ物の多い子どもでも、時には忘れ物をしないことがある。その原因、理由を調べてみると、子どもたちにとつて、興味や関心のある活動にかかわる「物」は忘れることが少ないということがわかってきた。このことは重大な意味を持つと思う。子どもたちにとつて魅力のある活動を展開することができた場合は、忘れ物が少ないということである。

子どもの忘れ物の原因の一部が、指導者にもあるというのは、このことである。



忘れ物が多い子の指導について

大 中 潤子（教員）

教職について日の浅い私が、このような原稿を書くことは大変おがましいことではありますが、毎日のように、「先生、〇〇を忘れました。」という子どもの声を聞きながら、なぜこんなに忘れ物が多いのか頭を悩ませている一人として、ペンを走らせています。いろいろ教えていただければ幸いです。

初めにクラスの紹介からします。男20名、女21名の二年生の一学級を受け持っています。明るく茶目っ気のある元気な子が集まっています。

私は、まず、子どもたちに、明日持つてくる物を連絡帳に書かせることにしました。確実に学習道具の用意をする手だてとして必要なことだと考えたからです。幸い、子どもたちは今までもやったことがあったので、何の抵抗もなく、上手に要領よくメモを取ることができました。

ところが、このメモを取らない子がいたのです。毎

日毎日、忘れ物をしていたので変だなと思い、聞いてみたところ、連絡帳を使っていないというのです。

それからは、このメモ取りをまず確実にしようと思いい、グループ（四人構成）ごとに、四人が皆、それぞれメモが取れたかどうか確認させました。すると、クラスの2／3ぐらいは忘れ物をしなくなつたように思えます。（この子どもたちは、こんなことをしなくても忘れ物をしないで、きちんと学習道具を揃え^{そろ}られる子なのかもしれません。）

さて、このメモ取りが徹底したようだと思っていたのにもかかわらず、忘れ物が後を絶たないのでどうしたのかと原因を探ってみると、連絡帳の使い方が悪いようなのです。つまり、書いてはみたものの時間割を揃えるときには全然見ないということなのです。そこで使い方の指導です。時間割を見るときに、連絡帳を開いてみることに。一つ一つ確かめながら揃えていくんだと……。また、時間割の調べ方についても話をしました。前の日、宿題をやり終えたらすぐに揃えること。そして寝る前に一回、学校に行く前に一回、全部で三回調べるんだよ。そうすれば忘れ物なんてしない

んだよと、オーバーなほどに話しました。

しかし、だめでした。決まった子たちが、いつも忘れるのです。それでも、初めは、私も優しく言っていました。

「そう。人間だから誰でも、うっかり忘れちゃうことがあるから仕方ないね。この次は気をつけようよ。」それが、翌日も翌々日も続くので、私の態度も変わってきます。

「なぜ忘れたの？ 昨日も忘れ物をしてるじゃない。連絡帳に書いたの？ 書いてない？ なぜ書かなかったの？ 連絡帳を見て時間割を揃えてるの？」などといった小言の繰り返しでした。

私が次に試みたことは、家庭へ連絡し、協力をお願いすることでした。以前、保護者から、「子どもが忘れ物をしているかどうかわからないから、そんな時は連絡してほしい」と言われたことを思い出したからです。

クラスの中の約束ごととして、忘れ物をしたら、自分で×をつける表があったので、それを活用し、×が10個ついたら、連絡帳で家の人に伝えることとしました。

この結果、忘れ物はだいぶ減りました。やはり家庭

の協力は、大きな要因になります。まして、小学校低学年の子にとっては、「○○は持ったの？」のひと声があるかないとでは、ずいぶん違うのではないでしょう。ただ、学習用具を揃えるのに、親が掛かりきりというのもどうでしょうか。私自身は、三年生ぐらいになつたら、明日持つて行くものぐらいいは、自分一人で揃えられるようになってほしいと願っています。子どもの心に、自覚が持てればそう難しいことではないと思うのです。

忘れ物が多い子の指導。私にもこれといった指導方法はありません。ただ、大事なものは、子ども自身がしっかり責任と自覚を持つこと。そのために、親や教師は試行錯誤しながら日々を送っているのだという気がします。親と教師が、気長に、それぞれの立場から子どもを見守り続けていきたいものです。



忘れ物の重大さを考えさせて

——タイミングの良い指導を——

佐藤 千代恵（保護者）

忘れ物の原点、私自身まじめに考えてみたことがなかったような気がする。「まったくしようがないわね、また忘れちゃった」みたいな感じで通りすぎて来てしまっている。改めてなぜ忘れ物をするかと考えてみると、実に多くの原因があるように思える。

まず親の責任とばかりに、子どもの行動に目をくばり世話をやく、子どもはそれに依存してしまうから子ども自身、忘れ物があるのかどうかさえわからず大事な忘れ物をする。自分の持ち物に無関心になる。過保護の結果であると思う。

反対に子どもの行動に無関心な親の子は、忘れ物の重大さを感じ取ることができずに忘れ物をする。これは放任型、どちらも親の責任であると思う。

子ども自身の性格的なものもあると思うが、なぜやりに……良く言えば物にこだわらない……ただ習慣的に日常生活をしていく、一種の惰性、つまり物事のけじ

めがないということが原因になっている場合もあるように思える。自分の好きなこと・楽しいこと、生理的欲望（ねる・食べる・排せつ）は絶対的に忘れないが、宿題・学習塾などは潜在的に嫌だという気持ちがある。それを補うために意識的に忘れ物をする。これは嫌なことから逃れるための口実の一つとなることもある。反対に相手の注意を引くために忘れ物をすることもある。また、単純なものには、テレビ、遊びに夢中になって次の行動に移るときにうつかり忘れるといった集中力・注意力・思考力・記憶力などの欠如。さらには相手の話をいいかげんに聞いて理解できずに大切な忘れ物をするなど、考えてみると忘れ物にもいろいろな性質のあることが改めて感じさせられる。

忘れ物をさせないためにまず、子どもの性格をつかんで、口うるさいと感じさせないように、過保護でなく、かといって放任でもなく、タイミングの良い注意を与えることが必要になってくる。

一、メモする習慣をつける

二、余裕を持つて準備させる

三、何が必要かを考えさせる

四、準備したものを確認させる

五、忘れ物の重大さを教えておく

こう書いてくると親の責任と、子ども自身の努力も必要になってくと思う。

私も今回、子どもを山村の活動に参加させたが、準備は子どもが全部自分でやるので安心していった。出発の朝、電車の時間を気にして早く行こうと、飛び出したら良いが、電車にのって帽子を忘れたことに気がついた。親の私が子どもに「忘れ物は？」と声かけなかったこと、確認を怠ったことの結果であると思う。

私自身もよく忘れ物をするので、夫に叱られることがある。「考えること、やるが多すぎて忘れてしまうの」と、自分なりに理屈をつけて逃れるけれど、重大な事にかかわっていれば、家庭生活や仕事の面で、非常に大きな影響を及ぼす結果につながってくるときもある。「忘れる」という言葉は身近ではあるが、生活していくなかで許されない場合があることを「忘れ」てはいけないうと、改めて自分に言い聞かせている。

会の趣旨である、子どもの自立心を育てることは、子どもが自分の行動に伴って何が必要かと考えさせるためにも、とても大切なことだと思う。子ども自身、行事に参加しながら、少しずつではあるが、自分で考え判断し行動できるように育ちつつある結果として忘れ物も少なくなっているように思う。私も親として、子どもが自然に、良い生活習慣を身につけるよう見守っていきたいと思う。



再掲載を受けて――

忘れ物から学べること

主 代 望 都（現・山村留学指導員）

忘れ物。私の大嫌いな言葉である。嫌いな理由は、単に私がよく忘れ物をして親や先生に叱られていたからという、どう考えても自らに非がある子ども時代の違いのせいなのだが。だから忘れ物という言葉聞くにつけ嫌な思い出がよみがえるし、過去のネガティブな体験を繰り返さないために忘れ物をしないようにしよう、という意識が働く。その意識自体は悪いものではないと思う。だが忘れ物をした結果、「自分が困る経験」ではなく、「親や教師を怒らせてしまった事実」が幼かった私の胸に深く刻まれてしまったのは、決してポジティブな学びとは言えない。その失敗から幼い年の気づきや責任感の芽生えといった前向きな出来事が付随すればよかったのだろうか、生来どちらかといえば悲観的な性格であった私の頭には、「忘れ物をする」と周りを怒らせる」という、実に表面的で浅

はかな感想しか残らなかったわけである。（無論、親や先生を責めているわけでない。）

私が育てる会に入職して今年度で7年目になるが、忘れ物をしがちな子ども達は当然何人も見てきた。自分が忘れ物をしがちな子どもだった過去から、そのような子ども達にどのような指導をすべきか、7年間思案してきた。最初のうちは、「忘れ物をさせない」ときに重きを置きすぎて、口酸っぱく警告するか指導員が子どもの持ち物を確認するか、はたまた指導員が忘れ物を学校に届けに行ったりセンターに取りに帰ったりするのが現実的な解決策となってしまうていた。そうせざるを得なかった、というのもあったが、妙な仏心が沸いてしまっていたのだ。結局その仏心が問題の解決を阻んでいることは分かりつつも、しばらくはその対応を続けていた。

さて、私が勤務するくらぶち英語村では、毎朝指導員が小学校まで子どもたちと歩いていく。ある日、小学生と通学路を歩いていると、もうすぐ小学校につくというところで一人の女の子が「あ、裁縫セット忘れた」と言い出した。その日は授業が何かで裁縫セット

が必要だったようだ。思わず「後で学校に届けてあげようか」と言いかけたが、その日私は何を思ったのか口を噤（つぐ）んでみることにした。「あらら」とだけ返すと、その子は私をちらちら見ながらさつきより大きな声で「どうしよう、裁縫セット忘れちゃった」とわざとらしく再度繰り返した。心の中で「さあ次はどう来るんだ？」と思いながら、「そつかあ」と返すと、その子はまた同じような内容を口にした。結局その子は小学校につくまで、私に聞こえるように何度も同じ言葉を繰り返していた。小学校に到着して別れる直前などは、私の真ん前に立って同じことを言っていた。そのころには私も意地になって、心の中で「取ってきてくださいって言ったらいいのにな」と思いながらもあえて自ら助力を申し出ることはしなかった。

彼女が何を思っただけという行動をとっていたのかは分からない。裁縫セットを届けてほしいと頼むのが怖かったのかもしれないし、あるいは頼むという行為がプライドゆえにできなかったのも知れない。（その児童の性格を考えると恐らく後者なのだが。）だが私はその子が忘れ物をしてしまったうえで、どう行動する

のかを見てみたかった。忘れ物をしてしまうのは仕方がない。だが私が先回りして助け舟を出してしまったら、その子の責任感も自主性も育たない。自分がした失敗の尻拭いを誰かがしてくれると考えるようになるだけだ。忘れ物を取ってきてもらう依頼をするかもしれないその子の判断に任せ、その結果伴う責任もいつかり経験させてやってこそ、真の学びに繋がると思っただのだ。

子ども達が忘れ物をしてしまうのは仕方のないことだと思ふ。特に山村留学施設においては、こまごました世話を焼いてくれる保護者の存在はない。大人ですら（むしろ年を取れば取るほど）忘れ物をしてしまうのである。いわんや子どもをや、である。子ども時代にする忘れ物は大概学校生活における忘れ物であり、致命的なものとはほとんどない。であればこそ、子ども達が忘れ物をしてしまった際に本当に必要なのは叱責でもフォロウでもなく、忘れ物をした結果発生する問題、課題、そして反省点にしっかり向き合う機会なのだ。それを胸に留めて今後も子ども達の指導に当たっていきたい。